

## 平成 20 年度大阪大学卒業式・大学院学位記授与式 総長式辞

まず、本日ここに集われた 3577 名の学部卒業生のみなさん、2131 名の修士の学位を授与されたみなさん、そして博士の学位を授与された 716 名のみなさん。卒業ならびに修了おめでとうございます。また、この日まで長きにわたってみなさんの勉学と研究を支えてこられたご家族の方々のご支援に対しても、ここに心より敬意を表したく存じます。

みなさんは、大阪大学におけるさまざまな専門の勉学と研究を今日を一区切りとして、これから、社会のさまざまな現場に出てゆかれます。そしてそのなかでさらに何かのプロフェッショナルとしてみずからを鍛え上げてゆこうとされておられることでしょう。生涯の仕事としてそういう道に就かれる前に、みなさんが学ばれたその大学を代表する者として、あらためてみなさんに申し上げておきたいことがあります。

科学の研究と技術の発展がこれまで、人類に多大な恵みを与えてきたこと、これは疑うべくもありません。それまで、飢死にさらされていた人類の貧困を救い、治癒できず堪え忍ぶよりほかなかった難病を克服し、大きく寿命を延ばし、生活上の利便を飛躍的に増大させ、さらには離ればなれになった人と親しく通信するという夢も実現してきました。近代の科学と技術が人類にもたらした福祉と安寧、これは挙げるときりがありません。

大阪大学も、いわゆる研究拠点大学として、学術の最前線でさまざまな画期的な研究をくり広げてきました。みなさんはそのもっとも基礎の部分の学ばれ、またその最先端の研究に携わってこられました。

大阪大学が昨年公表した「グラウンドプラン」にも、大阪大学の研究の三つの精神として「基本」と「ときめき」と「責任」を掲げています。英語でいえば“basic” “exciting” “responsible”です。

「基本」ということで、みなさんは科学的精神と合理的な推論の大切さを学ばれたはずで、これはこれからどのような職業に就かれても、その思考と行動においてきっと生きてくるはずで、「ときめき」ということで、みなさんは宇宙を、あるいは社会を動かしている未知の仕組みを発見してゆく学問の緊張感とわくわくするような愉しみをたっぷりと体験なさったことでしょう。さらに「責任」ということでは、環境破壊や経済不況、医療や介護や教育といった現場の疲弊など、昨今の日本社会、地球社会が直面している諸問題の解決に学術がどのような役割を果たしうるかを問うて、社会から委託された科学研究の重さに身を震わせた方々も少なくないはずで、

さて、こうした基礎研究の一端にふれるなかで、あるいは研ぎ澄まされた研究に参加するなかで身をもって学んだこと、それをこれからみなさんはどのように活かしてゆこうと考えておられるでしょうか。

一般に、専門を究めるといえるのは、研究であれ業務であれ、より細かく精緻な領域に入ってゆくということです。みなさんも大学に入るときに学部を選び、大学に入れば専攻を選び、さらに専門の研究課題を選ぶというふうに、関心の対象をより狭めていったはずで、そうするなかで、そのごく限られた研究領域のなかで、世界の先端の研究水準というものを知り、それに合流し、さらにそれを凌駕することに向学心を燃え上がらせたはずで

す。その筋のプロになろうとして。

しかしプロフェッショナルであるためには、みずからが専門とする仕事の仕方に磨きをかけるだけでなく、人びとのあいだでそれをきちんとマネージできなくてはなりません。そうでなければ、たんなる知的な好事家の域を出ることはありません。

先ほどわたくしは、科学技術が人類社会にもたらした福祉と安寧について述べましたが、しかしその科学と技術が人びとにいま少なからぬ不安をもたらしつつあることもまたたしかです。環境危機、エネルギーの確保、食の安全性、高度再生医療の行きつく先などをめぐり、人びとの不安はつりつつあります。その意味で、いまほど、科学と社会の関係、あるいは技術開発のあり方について、改めて基本的なことから考え直さねばならない時代はないとも言えるでしょう。多額の予算を使ってなされる科学研究といまも苦難にあえぐ社会とのつながりをデザインしなおす、そのことの必要をわたくしたち大学人は痛感しています。それこそが、先ほど申し上げた専門の研究や仕事のマネージメントということなのです。

大阪大学のような研究拠点型大学においては、専門教育をなにより重視しています。いろいろな分野のプロフェッショナルを育てることをまずはめざしています。けれども、プロフェッショナルがその専門性を十分に活かすためには、専門領域の勉強だけではどうしても足りません。なぜなら、一つの専門性は他の専門性とうまく編まれることがないと、現実の世界でみずからの専門性を全うすることができないからです。アイデアを一つの装置として仕上げるためにも、一つの発見を医療の現場で活かすためにも、あるいは一人の画家の仕事を展覧会のかたちでふり返るためにも、技術やアートや法律や経理の専門家とうまく組まなくてはなりません。

さて、別の領域の専門家と同じ一つの問題に共同で取り組むことができるためには、自分の専門的知見について、別の専門家（つまりまったくの素人）に関心をもってもらえるよう、そして正しく理解してもらえるよう、みずからの専門について興味深く説明する能力が必要になります。専門家としていま人びとがしなければならぬと考えられることを人びとに告げるときに、人びとにそれをしてみたいという方向へ気を向け替えさせる技術とでも言ったらいいのでしょうか、つまり、「しなければならぬこと」を「したいこと」へと変換させる技術です。そのためには、非専門家をはじめとして、異なる文化的素養をもつ人たちの関心をよく理解し、また深く刺激するような対話が可能でなければなりません。そうした術を身につけるためには、日頃から、異分野の人たちと深く交わっている必要があります。将来、医師になろうとしている人、法曹界に進もうとしている人、教職につこうとしている人、研究者や技術開発者になろうとしている人たちが、同じ一つの問題について侃々諤々議論するトレーニングを、日頃よりしている必要があります。

じっさい、一つの包括的な視点からすべて論じきれるような問題は、現実の世界にはめったにありえません。たとえばBSEの問題一つとっても、疫学的な視点はもちろん基礎として重要ですが、他国との外交や貿易摩擦の視点、さらにスケールを大きくとって牧畜文明の人類史的意味についての視点も、問題とその解決を展望するには必要となります。同じことはもちろん、環境問題やIT化社会の問題についてもいえます。とすれば、専門家にはその知識が「知の総体」のなかでどのような位置を占めるか、つまりは、みずからの知

を社会のより大きな枠組みのなかにいかにマッピングできるかが問われることとなります。自分が何を知っていて何を知らないか、自分に何ができて何ができないか、それを見通せていることが「教養」というものにほかなりません。内輪の符丁でしか語れない人は、そもそも専門家としても失格なのです。

ここでわたしはみなさんに、隙間を大切にしようと思し上げたいと思います。これは科学の研究においても、特定の業務においても、ひじょうに大切なものです。隙間とは、だれにも見えていないはずなのに、だれも見えていない、そういう領域のことです。

たとえば、科学研究をしているときには、物質の、あるいは社会の諸現象を規定している見えない構造や原理を捉えようと心を砕きます。けれども、その見えない構造や原理は、多くのばあい、既存の一定の理論の枠組みのなかで未だ知られていないことにすぎない場合が多いものです。一方、偉大な科学的発見というものは、その研究そのものが立脚している枠組みをしばしば根底から揺るがし、それを無効にしてしまいます。ということは、既存の枠組みのなかでは問題としてすら見えにくいこと、枠組みのなかではほとんど価値を認められていない現象に対する感受性のほうが、科学研究においてはより重要だということになります。ノーベル賞受賞者たちの少なからぬ部分の仕事が示しているように、同じ枠のなかでのゲームや競争に埋没しては、ほんとうの科学革命、ほんとうのイノベーションにつながるようなすばらしい研究は生まれないのです。

同じようなことが業務についても言えます。企業に新しい課題が立ち上がったとき、これはうちの部の仕事ではないと押しつけあうようでは、その課題は解決できません。だれの仕事でもないけれどだれかがしなければならぬ事柄だからこそ、とりあえずわたしがやっておく、とさりげなく言える、そんな社員が数多くいる企業は、問題をうやむやにせず前に進みます。ビジネスについてもそうで、隙間産業という言葉もあるように、ビジネスチャンスは往々にしてこうした既存の産業の隙間から生まれるものでしょう。

こうした大事な隙間を見つけられるかどうかは、日頃より、自分の専門を相対化するような眼をもっているかどうかにかかっています。いいかえれば、世界を複眼で見ているかどうかにかかっています。だからみなさんには、これからも専門的知見とは異なるもう一つの眼、つまり「教養」の眼を、いつも重ねあわせてものを見るように心がけてもらいたいです。勉強はいつまでも続きます、続けなければならないのです。

きょうわたしは、これから社会のさまざまな現場でプロフェッショナルになってゆかれるみなさんに、あるいは厳しい要求を向けすぎたかもしれません。

みなさんは一人の個人として、人生においてもこれからさまざまな危機に直面しそうですね。何のためにここにいるのか分からなくなったり、そもそも自分のような人間がここにいることに意味があるのかと、人生への深い疑問を抱くようなこともきっと少なからずあることでしょう。

そんなときにほんとうに親身になって応えてくれるのは、まずは、自分の存在を気遣ってくれる友人たちです。そして次に、同じような困難を乗り越えてきた未知の先人たちの言葉であり、メッセージです。

未知の先人たち、それは、たとえば人としてここにあることの意味を極限にまで問いつ

めてきた思想家たちであり、同じ時代の過酷な運命を憂え、そして一人でもそういう不幸な人の存在を許すまじと社会の運営に骨を砕いてきた企業家たちであり、わたしたちの心をそのもっとも深い部分で慰めてくれる芸術家たちであり、そして市井で無名のまま他の人びとの困窮を気遣い、無言で支え続けた人たちです。そういう未知の人たちの言葉、あるいは作品が、友人たちとともに、将来、あなたの危機を救ってくれるはずです。大学を離れても、そういう叡智にふれつづけることを忘れないでいただきたいと思います。

と同時に、それらの声に支えられるだけでなく、あなたがた自身もこんどは支える側に回ってほしいと思います。

オバマ米国大統領は、その就任演説を「新しい責任の時代」という言葉で結びました。たしかにこれまで、「責任」という言葉には「とらされる」「とらざるをえない」といった受け身の響きがありました。オバマ大統領はその演説のなかで、そうではなくて、むしろ進んで引き受ける「責任」について訴えかけました。日本語ではうかがいにくいのですが、「責任」をあらわす「レスポンスビリティ」という英語には「応じる」「応える」という含意が強くあります。レスポンスビリティとは、直訳すれば「レスポンドする能力」、つまり何かに応える用意があるということです。それはつまり、うめき声ともいえる他者からの呼びかけや訴えかけにきちんと耳を澄まし、その小さな声に“Can I help you?” とすぐに応じることができるということなのです。

そしてそういうレスポンスのこまやかな交換のなかで、ひとは不明になりかけた自分の存在を少しずつ少しずつ取り戻し、ひどい落ち込みから立ち直ってゆくことができるようになります。苦しいときに自分を支えるのは、他者からの救いの手や慰めの言葉である以上に、じつは、他者の小さな声に“Can I help you?” とすぐに応じることのできる心の構えなのです。そういうレスポンスビリティという意味での「責任」の意識を強くもった社会人に、みなさんにはこれらかなってほしいのです。科学研究のなかで培った見えない構造を見るというすべを、こんどは社会のなかで他者の聞こえない声を聴くというすべとしても活かしてほしいと思うのです。

みなさんが周囲の人たちから、「あいつにまかせておけば大丈夫」とか「こんなときあいつがいたらなあ」と言ってもらえる人になられたとき、そのときはじめて、あなたがたを送りだした大阪大学は胸を張ってその存在理由を確認できたことになるでしょう。

最後になりましたが、みなさんお一人お一人がこれからの長い生涯、幸運に恵まれ、悔いのない人生を送られることを祈りつつ、わたくしからの式辞とさせていただきます。